

瀬戸内寂聴

寂聴日めくり





中公文庫

じやくちよう ひ

寂聴日めくり

定価はカバーに表示してあります。

1997年11月 3 日印刷

1997年11月18日発行

著 者 ^{せ と うちじやくちよう} 瀬戸内寂聴

発行者 笠松 巖

発行所 中央公論社 〒104 東京都中央区京橋 2-8-7 振替 00120-4-34
TEL 03-3563-1431(販売部) 03-3563-3664(編集部)

©1997 CHUOKORON-SHA, INC. / Jakucho Setouchi

本文・カバー印刷 三晃印刷 用紙 王子製紙 製本 小泉製本

ISBN4-12-202982-1 C1195

Printed in Japan

乱丁本・落丁本は小社販売部宛お送り下さい。送料小社負担にてお取り替えいたします。

中公文庫

寂聴日めくり

戸



中央公論社

1月1日

新年の年たちかえる小倉山

明けましておめでとうございます。

旧きものは、すべて命の終りを迎え、新しい世の中は自然に脱皮更新し、新鮮な生命を得て、生きつづけるということをしみじみ感じさせられます。

年をとりますと古い昔がなつかしく、口癖に、昔のよき時代のことばかり言いたがるものですが、果してそうでしょうか。

大きな宇宙の視野から見れば、やはり世の中はさまざまな試行錯誤をくりかえしながらも、究極的には人間が平等に幸福になる世界、階級も差別もない社会へ向かって少しずつ歩みつづけているのではないのでしょうか。

人間の自由へ向かって、世界は確実に動いているような気がします。

寂庵は小倉山の麓に位置します。昔の小倉山は古歌にも歌われ、鹿がたくさんいたそうですが、もう鹿の姿は見る事が出来ません。それでも新年がくれば「新玉の年たちかえる小倉山」と、私は口ずさんでしまいます。去年は精一杯仕事をし、思い残すことのない一年を過ごさせていただきました。生かされている感謝の気持ちをこめて、今年も報恩の道をひたすら進みたいと思います。

1 月 2 日

胸ノ間ノ方寸ニ ほうすん

心法本ヨリ形ナシ しんぽうもと

内外処々ニアラネドモ ないげしよしよ

胸ノ間ノ方寸ニ ほうすん

阿利耶識トナヅケタル ありやしき

流来生死ノ昔ヨリ らいしやうじ

分段輪廻ノ今マデニ ぶんだんりんね

介爾利那ノ物ナラデ けにせつな

綿々タル事年久シ めんめん

元三大師良源（九一二―九八五）の註本覺讚のことばです。

元三大師は正月三日に示寂（亡くなる）されたので、人々は元三大師とお呼びするようになりました。天台宗中興の祖と仰がれ、民間では観音、不動の化身と崇拜されていました。

1月3日

❖ 心はどこにあるか——心法しんぽうもとより形なし

この詩は、人間の心は胸の間に一寸四方の台があり、その上にアラヤシキと名のつくものが乗っている。それが心だということです。心はもともと形がないし、どこにも見当らない。ただ胸の中にあつて、人間が生れ変り死に変わる永劫の昔から今まで、瞬間の絶間もなくつづいていくということです。

この詩では阿利耶識ありやしきとっていますが、阿頼耶識あらやしきと普通音訳しています。大乘仏教のいう深層心理で、人間が如来さまになれる種子もこの中に入っていると考えます。

仏教では人間は仏さまになれ、一人一人の人間の心の中に仏さまはいらっしゃるといふ考え方をします。

1月4日

いずれの時か夢のうちにあらざる

いずれの時か夢のうちにあらざる。いずれの人が骸骨にあらざるべし。

一休宗純（一三九四—一四八一）のことば。

正月元旦は昔からめでたいものと人々が祝うなかで、一休は、生者必滅会者定離のことわりも知らないでめでたがっている愚かさよとあわれみ、墓場で髑髏を拾ってきて竹にくくりつけ、それをかざして洛中を歩きまわりました。家々の門口でその髑髏をさしだし「この通り御用心御用心」といったので、人々は嫌がって門を閉ざしてかくれてしまいました。ある人がどうしてめでたい元旦にそんな忌わしいことをするのかと問いますと、

「いや、わしもめでたいので祝っているのだ。およそ髑髏ほどめでたいものはない。よく見てごらん。目の出た穴ばかりじゃ。やがてはみんなこうなる。目出たいことではないか」

といって人を教化したという話が『行実譜』に出ています。

1月5日

◆ 冥途めいどの旅の一里塚 めでたくもあり

一休は、

「元旦や 冥途の旅の一里塚 めでたくもありめでたくもなし」と謡って歩いたとも伝えられます。

「いずれの時か」のことは『一休骸骨』に出ています。

人生はおよそすべて夢まぼろしの中にある。人はやがてすべて死に、骸骨になるのだ。生きている人だってひと皮むけば骸骨だ。この世の夢まぼろしの栄華や色欲に迷わされず、残りの人生を性根を据えて生きようではないか、という教化なのです。

1月6日

布施ふせのよろこび

出家して以来、いつの間にか人々から布施をもらう習慣がついてしまいました。出家者は人に布施という善行をするチャンスを与えたことになるから、お礼をいう必要はないのだと教えられてきました。とはいっても私のように五十を過ぎて出家した人間は、なかなかそうは思えず、お布施をいただくたび、勿体なくて気恥しくて困りきっていました。

先年の暮、あんまり『寂庵だより』が遅れつづけたおわびと、新年のお年賀の気持をこめて、読者の皆様に、私の描いた俳句と観音さまの絵の手拭いをお贈りしました。思いがけなかったといったださるのが何より嬉しく、野良仕事にかぶってくれるというのも、壁にかけてくださるというのも、すべて有難く嬉しく、本当に布施行の功德を十二分にいただいたと感謝しています。

布施波羅蜜はらみつは、六波羅蜜の第一にあげられる行で、平たくいえば人にプレゼントすることです。お返しは人からでなく仏さまが与えてくださいます。今私の手許にある皆様の喜びを伝えたお便りこそ、観音さまからの私へのお年玉だと有難くいただいています。

1月7日

Q

寂聴さんの写経の終りの名前を書くところに、「沙門 寂聴」と書かれているのを見ました。沙門良寛というのも見たことがあります。沙門の意味を教えてください。

A

sramana (サンスクリット)、samaṇa (パーリ語) の音写で、「しゃもん」とも「さもん」とも呼びます。沙門那、桑門、喪門ともいいます。お釈迦さまの存世の頃は、仏弟子たちはみんな同じように「沙門」とか「釈子」とか呼ばれていました。

インドでは出家者のことを呼ぶ総称です。出家者とは剃髪し、さまざまな悪い行いをやめ、身心を制御して、善に励み、悟りを得ようとつとめる人のことです。仏道修行の出家者をあらわす言葉です。私は出家していますので、沙門といっているわけです。

僧侶には各宗派とも位があります。私も正式の位は権僧正ごんそうじょうというのですが、そんな位をいうより、ただの沙門という方が好きです。寂聴尼と書いてもいいのですが、私は沙門の方が尼というより好きなので、こう書きます。

1月8日

盲亀浮木

仏陀がある日弟子たちにいわれました。

「比丘たちよ、大海の中に、人が一片の軛くびきを投げた。それには一つだけ穴があいていた。そこに一匹の盲目の亀がいて、百年に一度だけ海面に浮んで首を出す。その亀が軛にたまたま出逢い、その穴に首をさしこむということがあるだろうか」

「そんなこと、考えられません」

「そうだとも。しかし盲亀が浮木の穴に首を入れるより、もっと希有けうなことがある。それは一度地獄に堕ちたものがふたたび人間に生れるということだ」

釈尊のこの教えは、「人身受にんじんけ難し、仏法遭あい難し」というように解釈して、伝え広まっています。

仏教では、真に涅槃ねはんに入ればこの娑婆には二度と生れず、永遠の平安の中に眠ると考えます。それを理想としますが、われわれ凡夫はとうていそんな涅槃には入れません。必ず輪廻りんね転生てんしょうしてふたたびこの世に生れかわるでしょう。その時、人間に生れるかどうかは仏さまの決めることで、自分で選べないのです。

1月9日

◆ 人間に生るる事大いなるよろこびなり

恵心僧都えしんそうず（源信）の念仏法語にも、

「夫一切衆生それいつさい三悪道さんあくどうをのがれて人間にんげんに生るる事大いなるよろこびなり」といわれています。みみずや蚊に生れかわる自分を想像するより、やっぱり人間に生れたいものです。

「この身今生こんじょうに度せずんば何れの時にか度せん」
生きている今、人間としての最善を尽せとの、釈尊の教えです。

1月10日

AQ

なぜお寺の前に仁王さまがいるのでしょうか。

仁王さまは、金剛力士像のことです。密迹みつしやく金剛力士といっています。仁

王さまは寺院の守護神ですから、一對の仁王さまを仁王門に安置して、

お寺の浄域を守ってもらうわけです。

手に金剛杵しよを持ち、その威力で仏法を守護する夜叉神やしやじんです。だから仁王はこわい忿怒形ふんぬをしています。

一体は口を大きく開けた「阿形」で、他の一体は口を閉じた「吽形うん」です。「あうんの呼吸」というのもこれから出ています。

1月11日

Q

私の家には六十年前から、木造の左手の欠けたお釈迦さまがあります。仏壇屋に修理に出したところ、魂を抜いてから出すものと教えられ、怖くなりました。修理された仏さまは親指のつけ根が赤くなっており、涙のようなものが見えます。毎日仏さまを拜んですが心配です。大丈夫でしょうか。

A

大丈夫です。寂庵の御本尊も手が欠けたままです。古美術商から十四年前買ったままで、修理には一度も出していません。それでも私も寂庵も何の被害にもあいません。

心配しないで熱心に祈ることです。不安なら、近くのお寺の住職さんに一度拜んでもらいなさい。

1月12日

生きながら死ぬ日々

欧米の人が寂庵へ訪ねてくると、必ずといっていいほど、「輪廻転生をどう思うか」と訊きます。つまり、前世と来世を信じるかというのです。彼らの期待する答えは、仏教徒として輪廻転生を信じているといってほしいのであり、自分たちもそれを信じたいという願望を切に持っているらしいのです。

仏教の本当の涅槃は、死ねば死につきりで、苦のない安楽浄土へ行ってしまう、二度と苦しみのみちみちたこの世には帰って来ないのですというところ、みんな露骨に失望した表情になります。輪廻転生はいくらでも生き直してくる、つまり永遠に命は絶えることがないから魅力があるというのです。

人は誰でも、この世がいくら苦の世界で悲しみに沈み、恐怖の連続のいわば地獄であろうとも、苦のない未知の世界へ行くよりは、この世に残りつづけたいと願うものなのです。

病苦の激しい病いや不自由な寝たきりの病人でも、死後、ああこれで楽になりましたねと慰めるのは、遺された者の心情で、死んでいく人たちは、果してそう思っているかどうかかったものではありません。

1月13日

◆ 愛別離苦あいべつりく

多くのやさしい家族に見守られ、わが家の座敷で死んでいった知人の臨終に、私は立会ったことがあります。長い癌との闘病生活の終りでした。私は病人の手をとって、

「こんなにやさしい家族によくされて、幸せな生涯でしたね」

といいました。それはもう聞えていないかもしれないと思う病人に対して、私の独りごとにしたつぶやきでした。すると病人がかつと目を開き、涙を両眼にもりあがらせ、

「だから……こんなやさしい者たちと別れて、わたしひとりがあの世に行かねばならないのがつらいんです」

といいました。私は握った病人の手を取り落しそうになりました。聡明な忍耐強い病人で、病中も家族をいたわり、自分に奉仕してくれるすべての人に感謝のことばを忘れない人でした。浄土真宗の寺の檀徒で、毎朝、仏壇の前で名号をとなえていました。

誰も死にたくはないのだと、その人の死を見送ってつくづく思いました。